

平和な社会、次の世代へ



E.山から見下ろした首都ディリ中心部。緑の多い街だ



F.海岸沿いの目抜き通りなどでは紛争で破壊された建物の改修が進んでいる。一方で、まだ生々しい傷跡が残る場所も
G.サンタクロースの帽子をかぶった少年が、父のバイクで学校に行く弟を見送る。ペットボトルにはガンリンが入っている

あーん、と口を開けてシスターからパンを受け取る男の子。とある日曜日、首都ディリの教会は神への祈りをささげる人々で賑わっていた。40年余りの間、ポルトガルの統治下にあった東ティモール。その影響もあってカトリック教徒が多い。年が明けた1月、まだ街にはクリスマス風のデコレーションが残っていた。

21世紀最初の独立国、東ティモールが独立を果たしたのは2002年のこと。まもなく10年がたとうとし

平地が少ない東ティモールでは、大多数の人々が急峻な山道の脇に集落を作って暮らしている。舗装された道路もあるが、維持管理がなされていない。洪水で山道が分断されれば、人の行き来や物資の輸送が困難となる。

ディリから、コーヒーの産地エルメラ県に向かった。くねくねした山道のあちこちにある陥没を避けながら走行したため、およそ60キロの道のりに3時間もかかってしまった。こ

ているが、いまだ国際機関の支援を受けて治安維持に当たっており、国の基盤となるインフラ整備などはこれから本格化させていく。

国土は、ワニのような形をした細長いティモール島の東半分。長野県くらいの大きさで、島の東西には山岳が背骨のごとく連なっている。国民の約8割が農業をなわいとしており、中でも山岳地帯の気候を生かして作られたコーヒーは、同国唯一の輸出品。主食のコメは、長年の紛争で生産システムが十分に機能を果たせず、輸入に頼らざるを得ない状況であり、現在、国を挙げて自給率の向上に取り組んでいる。



お祈りが終わった後、シスターからパンを受け取る人々。ディリ市内にはたくさんのカトリック教会があり、公用語であるテトゥン語とポルトガル語のミサが時間を分けて行われる



A.コーヒーの実。赤い色に熟すと収穫期
B.山あいのマーケットで売られているタロイモ
C.路上のお米屋さん。現在、東ティモールは輸入米によって需要を満たしている
D.山道の道路は舗装状態が悪く、雨で地盤が緩んだこの日、乗合トラックが転落。心配された乗客は、皆無事だったそう





首都：ディリ
 面積：約1万4,900km²（長野県とほぼ同じ大きさ）
 人口：106万人（2010年暫定値）
 公用語：テトゥン語、ポルトガル語
 宗教：キリスト教（大半がカトリック）
 1人当たり国民総所得（GNI）：2,460ドル（2008年）
 経路：日本からの直行便はなく、インドネシアやシンガポールでの乗り継ぎが一般的。
 通貨：米ドル(USD) 1USD=約84円(2011年4月現在)
 気候：首都ディリを含む北部海岸線沿いは乾燥の厳しい熱帯気候で一年を通じて高温。雨期は11～4月、乾期は6～9月。5月と10月は移行シーズン。



H. 村人たちが協力して、調理場のかやぶき屋根をふき替える。かまどから煙が出るため、寝室(左)とは別棟にしている
 I. 日本が支援した井戸で洗濯をする女性。水道・電気も不十分だが、家族の団結は強い

農村の家庭料理 「バタールダーン」



16世紀から1974年まではポルトガル、そして75年から約25年間はインドネシアの統治下にあった東ティモールは、食文化もその影響を大きく受けている。都市部で暮らす人々が普段から食べているものはインドネシア料理に近い。大豆の発酵食品であるテンペや豆腐などにチリやココナツミルクを合わせるという味付けは、まさにインドネシアと同じ。

他方、フェスタと呼ばれる冠婚葬祭では、バターを使った料理やデコレーションケーキが出されることが多く、こちらはポルトガル料理の流れを感じさせる。フェスタでは、大切な財産である牛や豚を大勢で分け合って食べるのも、人々の楽しみとなっている。テトゥン語で「ゆでトウモロコシ」という意味の「バタールダーン」は、人口の多い農村部で日常的に食べられている料理。雨期に収穫したトウモロコシを、虫がつかないようにかまどの煙でいぶして乾燥状態にし、保存する。一般的な調理法は、ピーナツや大豆、青菜などの季節の野菜と一緒に煮込むというもの。栄養バランスが良いため、「乳の出が良くなる」と産後や授乳中の女性に人気だ。もちもちとしたトウモロコシとシャリシャリのゆでピーナツの食感がマッチし、一口食べた瞬間、素朴で優しい味が広がる。ぜひお試しを。

- 【材料(1人前)】**
 トウモロコシ130g／水約2L／塩小さじ2／ピーナツ・大豆・いんげん豆などの豆約30g／青菜などの野菜適量
- 【作り方】**
1. たっぶりのお湯を沸かし、洗ったトウモロコシと豆を入れる。
 2. 材料が柔らかくなるまで1時間ぐらい煮る。
 3. 切った野菜を加え、塩で味付けする。

※野菜は、カボチャの葉、ハヤトウリ、ニンジンなどでもよい。お好みでアイマナスと呼ばれるチリソースをつけて食べてもおいしい。



台所の天井に吊るし、乾燥させて保存するトウモロコシ

編集協力：認定NPO法人シェア＝国際保健協力市民の会 東ティモール 吉森悠(管理栄養士)

れでは、物流が満足にできない。経済発展を促進するためにも、インフラ整備は重要な課題だ。

一方、村の生活は、電気も水道も通っていない場合が多い。訪れた村は、家畜の糞尿から出るメタンガスを使って発電するシステムを持っていたが、電気を使用できるのはわずかに夜の数時間のみ。村人は家屋に小さな電球をとり、ラジオを聞くくらいである。

しかし、村長を中心に皆が団結して生活している。どこか懐かしいかやぶき屋根をふき替える時には子どもたちが集まり、その様子を見守る。三度の食事では、たくさんあるわけではないのに、タロイモやキャッサバ、バナナなどを分かち合い、心豊かに暮らしているように見える。

次世代に、資源が残るように。「独立の父」と慕われるシャナナグスマン初代大統領(現首相)は今、テ

イモール海で発見された新たなエネルギー資源である油田に注目する。他国による統治時代を長きにわたって経験し、世代によって教育を受けた言語が異なる東ティモール。それ故、国民同士でもいまだ意思の疎通が難しい場面もあるという。課題は幾重にも重なるが、人々が成長への確かな一歩を踏み出すことにより、平和な社会が築かれていくことを期待したい。



村の診療所までやって来た子ども。道路や医療サービスが未整備のため、国民が等しく医療を受けられるまでには、まだまだ時間がかかりそうだ



天真らんまん子どもの笑顔には、明るい未来が感じられる



地元のNGOが運営する青少年センターの壁に描かれたイラスト。このセンターでは、平和構築を目的に若者に芸術やスポーツなどを教えている

復興から 経済発展へステップアップを

2012年で独立10周年を迎える東ティモール。基本的なインフラ整備などの緊急復興支援が一段落し、今後の経済発展を目指す東ティモールに対して、JICAの支援は、より経済開発に貢献する国づくりへと移行している。



(上)道路インフラの整備能力向上のための南南協力で、インドネシアの専門家から測量技術の指導を受ける東ティモールの研修員
(下)道路の維持管理を担うインフラ省道路・橋梁・治水局が道路の復旧を行う



主食であるコメの生産性向上を目指すため、農業技術支援を受けながら田植えを行う住民たち

JICAは2000年に東ティモール事務所を開設し、紛争で破壊されて何もなかった状況の中、国の基盤であるインフラ整備などの「緊急支援」とそれらの維持管理の促進、また、農業の生産性向上という「復興支援」に重点を置いた協力を行ってきた。その後、治安は落ち着き、紛争からの復興は一段落したといえる。

だが、東ティモールにはこれといった産業や、コーヒー以外の輸出用農作物があるわけではなく、援助国からの歳入を除く一般財源の95%を石油収入に依存している。また、この10年間での貧困率が増加したり、妊産婦死亡率が悪化するなど、解決すべき課題は多い。そこでJICAは、2030年までに中所得国入りを目指す同国の国家開発目標を後押しするため、現行の4つの重点分野から、一定の成果を見せている「平和の定着」を収束課題として位置付け、今後は次の3つの重点分野に絞り込んで、より経済開発を見据えた支援に移行しようとしている。

一つ目が、経済成長に欠かせないインフラ開発。今後、新規産業を生み出すためにも重要な道路や上水、電力などの整備

に向けてさまざまな事業を展開中だ。例えば、東ティモールでは道路が唯一の交通手段だが、正しく維持管理されていないために道路が壊れて交通が遮断されることも多い。この状況は経済活動を停滞させるだけでなく、地方部へのアクセスを妨げ国民の基本的な生活でさえ悪化させる可能性がある。

そこで05～08年に行われた「道路維持管理能力向上プロジェクト」と、2010年から始まった「道路施工技術能力向上プロジェクト」では、道路の維持管理や災害時の復旧活動に必要なデータベース、連絡マニュアルの作成、定期的な道路の点検と点検結果のタイムリーなデータベース化などを実施。これらを通じて効率的な道路維持・補修計画を策定するなどして関係省庁の道路事業のマネジメント能力の向上を目指している。

二つ目が、農村開発分野。同国では全就業人口の約8割が農業で生計を立てているものの、農業インフラなどが未整備で農業生産性が低い。そこでJICAは「マナツト県灌漑稲作プロジェクト」を実施。灌漑施設の修復のほか、適正品種の選定や農

業機械の活用方法などの農業技術の移転を通して、コメの生産性向上を図っている。

三つ目の人材育成分野では、「東ティモール大学工学部支援プロジェクト」を行い、国内唯一の国立大学を支援している。同校は、国づくりを担う技術系人材を育成するため2000年に開校したものの、大学側に高等技術教育体制の整備・運営の知識が不足していた。そこで、教官の指導力向上やカリキュラムの策定支援などを通して、大学運営の能力強化を進めている。

さらにJICAは、東ティモール・インドネシア間の南南協力の推進にも力を入れている。東ティモールでは、占領時代の歴史からインドネシア語が浸透していたり、道路の設計仕様がインドネシア式だったり、随所に同国の影響が残っている。そのため「東ティモールはインドネシアから学びたい」、「インドネシアは東ティモールに教えたい」とニーズが一致している。そこでJICAは、援助国としての経験が十分でないインドネシアに対してインフラ、環境、高等教育などの分野で、効率的な協力体制の構築を後押ししている。



(左) 将来の国づくりを担う人材輩出を目指す東ティモール大学で、生徒たちに物理実験の実習を行うJICA専門家
(右) 東ティモールでは青少年活動の職種で2人の青年海外協力隊が活動中。人権教育などを行う青少年センター「Ba Futuru」で、青年たちに日本語を教える隊員 (撮影:久野真一)